

(約一〇万㎡)の確認調査が実施され、遺跡が南へ拡大することが判

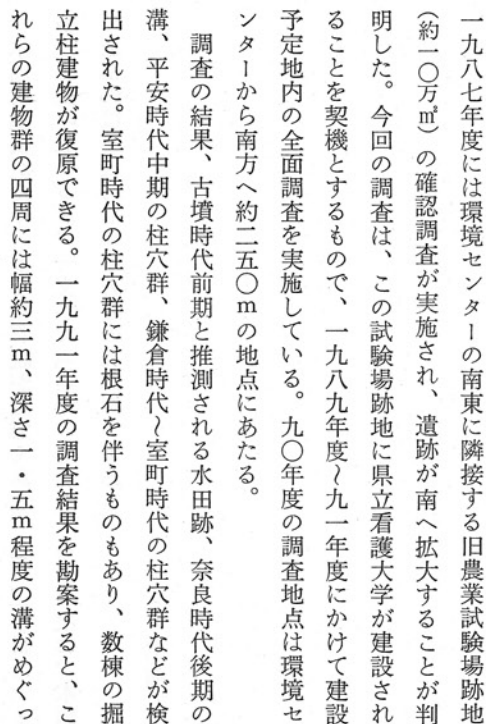
- 一九八七年度には環境セクターの南東に隣接する旧農業試験場跡地（約一〇万㎡）の確認調査が実施され、遺跡が南へ拡大することが判明した。今回の調査は、この試験場跡地に県立看護大学が建設されることを契機とするもので、一九八九年度～九一年度にかけて建設予定地内の全面調査を実施している。九〇年度の調査地点は環境セクターから南方へ約二五〇mの地点にあたる。
- 調査の結果、古墳時代前期と推測される水田跡、奈良時代後期の溝、平安時代中期の柱穴群、鎌倉時代～室町時代の柱穴群などが検出された。室町時代の柱穴群には根石を伴うものもあり、数棟の掘立柱建物が復原できる。一九九一年度の調査結果を勘案すると、こ

(約一〇万㎡)の確認調査が実施され、遺跡が南へ拡大することが判明した。今回の調査は、この試験場跡地に県立看護大学が建設されることを契機とするもので、一九八九年度～九一年度にかけて建設予定地内の全面調査を実施している。九〇年度の調査地点は環境セクターから南方へ約二五〇mの地点にあたる。

調査の結果、古墳時代前期と推測される水田跡、奈良時代後期の溝、平安時代中期の柱穴群、鎌倉時代～室町時代の柱穴群などが検出された。室町時代の柱穴群には根石を伴うものもあり、数棟の掘立柱建物が復原できる。一九九一年度の調査結果を勘案すると、これらの建物群の四周には幅約3m、深さ一・5m程度の溝がめぐつ

(約一〇万㎡)の確認調査が実施され、遺跡が南へ拡大することが判明した。今回の調査は、この試験場跡地に県立看護大学が建設されることを契機とするもので、一九八九年度～九一年度にかけて建設予定地内の全面調査を実施している。九〇年度の調査地点は環境セクターから南方へ約二五〇mの地点にあたる。

調査の結果、古墳時代前期と推測される水田跡、奈良時代後期の溝、平安時代中期の柱穴群、鎌倉時代～室町時代の柱穴群などが検出された。室町時代の柱穴群には根石を伴うものもあり、数棟の掘立柱建物が復原できる。一九九一年度の調査結果を勘案すると、これらの建物群の四周には幅約3m、深さ一・5m程度の溝がめぐつ



(約一〇万㎡)の確認調査が実施され、遺跡が南へ拡大することが判明した。今回の調査は、この試験場跡地に県立看護大学が建設されることを契機とするもので、一九八九年度～一九九一年度にかけて建設予定地内の全面調査を実施している。九〇年度の調査地点は環境セクターから南方へ約二五〇mの地点にあたる。

調査の結果、古墳時代前期と推測される水田跡、奈良時代後期の溝、平安時代中期の柱穴群、鎌倉時代～室町時代の柱穴群などが検出された。室町時代の柱穴群には根石を伴うものもあり、数棟の掘立柱建物が復原できる。一九九一年度の調査結果を勘案すると、これらの建物群の四周には幅約3m、深さ一・5m程度の溝がめぐつ

(約一〇万㎡)の確認調査が実施され、遺跡が南へ拡大することが判明した。今回の調査は、この試験場跡地に県立看護大学が建設されることを契機とするもので、一九八九年度～九一年度にかけて建設予定地内の全面調査を実施している。九〇年度の調査地点は環境セクターから南方へ約二五〇mの地点にあたる。

調査の結果、古墳時代前期と推測される水田跡、奈良時代後期の溝、平安時代中期の柱穴群、鎌倉時代～室町時代の柱穴群などが検出された。室町時代の柱穴群には根石を伴うものもあり、数棟の掘立柱建物が復原できる。一九九一年度の調査結果を勘案すると、これらの建物群の四周には幅約3m、深さ一・5m程度の溝がめぐつ

(約一〇万㎡)の確認調査が実施され、遺跡が南へ拡大することが判明した。今回の調査は、この試験場跡地に県立看護大学が建設されることを契機とするもので、一九八九年度～九一年度にかけて建設予定地内の全面調査を実施している。九〇年度の調査地点は環境セクターから南方へ約二五〇mの地点にあたる。

調査の結果、古墳時代前期と推測される水田跡、奈良時代後期の溝、平安時代中期の柱穴群、鎌倉時代～室町時代の柱穴群などが検出された。室町時代の柱穴群には根石を伴うものもあり、数棟の掘立柱建物が復原できる。一九九一年度の調査結果を勘案すると、これらの建物群の四周には幅約3m、深さ一・5m程度の溝がめぐっており、三二m×三六m程度の長方形の区画が存在したものと認識できる。また、区画内には井戸・溜井戸が検出されている。遺物は遺構が存在する各時期の土器が出土しており、奈良時代では二点の墨書のある須恵器が含まれている。また、井戸・溜井戸からは、井桁・曲物・臼・下駄・漆碗などの木製品が出土している。

さて、木簡は、上層より掘り込まれた二本の近世の溝から一点出土した。溝一からは(1)~(14)、溝三からは(15)が出土している。溝一は中世の長方形区画の東辺の溝と重複し南流する幅四m以上、深さ一・五m程度の溝である。厚く腐植土が堆積しており、木簡のほか漆碗・箸・楊枝・らおなどの木製品三〇〇点余りが、一八世紀を前

後する多量の近世陶磁器・土師器類とともに出土している。遺物の出土する範囲は限られており、遠方より流れてきた状況ではない。溝三は東西方向に走る幅1m、深さ50cm程度の溝で明治時代以降まで使用されていた農業用水路である。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「宝永参年 正月吉 ×
〔口分力〕 〔二カ〕
〔五拾文廿四日〕」 (223) × 47 × 4 019
- (2) 「五拾文廿四日」 (167) × (36) × 5 065
- (3) 「五匁」 (141) × 32 × 2.5 059
- (4) 石や吉兵衛殿 尚兵衛 ○
〔豊カ〕 大 内百八拾八入 ○
〔大〕 (180) × 32 × 4 019
- (5) 万四郎 天 〔 〕
- 万四郎 天 あ八ちや (96) × (93) × 8 081
- 岩

- (6) あ八ちや 〔之カ〕
- 万 〔八カ〕
郎 〔家カ〕
- (7) 見明屋 〔豆カ〕
屋 〔すすさカ〕
〔七七入カ〕
120 × 44 × 6 011
- (8) 子五月 〔村カ〕
作兵へ
- (9) 〔順カ〕 (132) × 27 × 3 051
- (10) 三郎 (85) × (32) × 4 081
- (11) や (80) × (16) × 3 081
(38) × (18) × 3 081

(12) ・ □ □ □ 太郎^{〔兵衛カ〕} 弥右衛門

・ 升伝

弥右衛門

(169) × 22 × 7 081

(13) ・ □^{〔伝カ〕} 衛門

・ ○ ふしへ村 尚兵衛 □

(133) × 19 × 6 031

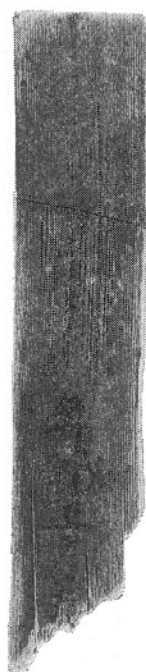
(14) 〓 □

(109) × (29) × 8 039

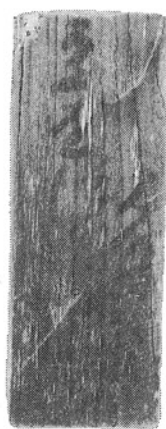
(15) ・ 〓 □ □

・ 〓 □ □ (92) × 47 × 5 019

木簡一五点のうち、切り込みを入れたり穿孔を施したりするなど、付札の態をなすものは五点、その他は薄板・箱物などの材への墨書である。宝永三年（一七〇六）の紀年銘をもつ(1)は、六カ所に木釘が遺存している。(9)(10)(11)は材質からみて、当初は一つのものであった可能性がある。(5)(6)は文面、板の材質・厚さからみて元は一枚の板であった可能性が強い。両者とも裁断され一部加工が施されたため、接合はしない。(6)裏面の「家」は墨痕が重複しており、(5)と同様「天」の可能性もある。(7)は上隅に釘孔が残る。(13)に記された「ふしへ村」（藤江村）は、吉田南遺跡の南西約2kmに位置した村名であ



(1)



(7)表

る。(14)は一端に切り込みを入れるものである。墨書は削られ部分的に残存している。なお、〇三三型式で墨痕がないもの(150×33×8)がもう一点溝一より出土している。

木簡の釈読については、兵庫県立歴史博物館の諸氏のご教示を得た。なお、釈読は現在も継続中であり、補訂の余地があることを申し添えておく。

9 関係文献

田辺昭三「兵庫・吉田南遺跡」『木簡研究』一 一九七九年

岡崎正雄「兵庫・吉田南遺跡」『木簡研究』一一 一九八九年

(西口圭介)